「妊娠中毒症と中高年の高血圧に関する研究」

― 腎透析患者のRetrospective research―

分担研究：妊娠分娩と中高年婦人の健康に関する研究
三重大学医学部産科婦人科学教室
研究協力者　豊田　長康

要約：女性透析患者105名，全症例の妊娠分娩産褥歴，現病歴，既往歴等について問診を行なった．妊娠分娩産褥歴を十分検討できたものは55名（３８～６１歳）であった．(1)対象105名中基礎疾患は慢性腎炎が最も多かったが，最近はＤＭ腎症が増加していた．(2)対象５５名中純粋型妊娠中毒症は30名，混合型妊娠中毒症は7名，妊娠中毒症既往なしは18名で，中毒症の既往があるものは67.3％であった．(3)透析導入年令および最終分娩より透析導入までの期間は，それぞれ妊娠中毒症群33.9±8.6歳，12.8±5.3年，既往なし群40.9±9.2歳，20.9±4.6年と妊娠中毒症群において有意に若年で期間も短かった．(4)混合型群は純粋型群に比べ同様の傾向が認められた．(5)純粋型で後遺症を残した群と残さなかった群間では，透析導入年令も最終分娩から透析にいたる期間も若年化，短期間傾向が認められた．

(6)現在の高血圧の有無による分類では平均出生体重が，高血圧群2839±628ｇ，非高血圧群が3096±616ｇと高血圧群において有意に低値であった．
(7)妊娠中毒症既往なし群では６名（33.3％）がＤＭ腎症であった．妊娠中毒症既往なしの群，高血圧群においてＤＭの家族歴を有する者が多かった．

見出し語：妊娠中毒症，腎透析，高血圧

研究方法および対象：山田日赤病院(三重県伊勢市)および武内病院にて透析を受けている女性患者を対象として，現病歴，既往歴，家族歴等を本人の同意を得た後，アンケートおよび問診にて調査を行った．

山田日赤病院は対象患者44例中27例，武内病院は82例中78例(未産婦12例)計105例にアンケート調査および問診を行った．105例中妊娠分娩産褥（特に妊娠中毒症合併の有無およびその後の経過）経過を検討できた55例(38～61歳)については更に検討を行なった．母子手帳を確認できる症例は確認を行なった．妊娠中毒症に関しては，今回は特に重症・軽症の区別は行わなかった．

結果：(1)全症例：平均年齢は57.5±13.8(12～85)歳，腎症状初発平均年齢は40.2±18.4(3～80)歳，腎透析開始平均年齢49.4±15.7(12～82)歳，平均透析期間は8.1±6.6（0～24)年であった．腎生検は９例(8.57％)に行われていた．基礎疾患名を表1に示すが，慢性腎炎が52例(49.5％)と最も多く，ついで糖尿病15例(14.3％)であった．

表１．105 症例の基礎疾患

	症例数	%
慢性腎炎	52	49.5
ＤＭ腎症	15	14.3
ネフローゼ	8	7.6
嚢胞腎	2	1.9
その他	10	9.5
不明	18	17.1
計	105	

透析導入後５年以内の患者39例中13例（33.3％）の基礎疾患はＤＭ性腎症で，最近の傾向と同じであった．年齢別基礎疾患分類を表２に示す．

表２．年齢別基礎疾患比率

	基礎疾患	例数	比率%
～40 歳 7 例	慢性腎炎	3	50.0
	ＤＭ腎症	1	16.7
	ネフローゼ	1	16.7
	その他	1	16.7
	計	6	
41 ～50 歳 ２４例	慢性腎炎	16	76.2
	ＤＭ腎症	2	9.5
	ネフローゼ	2	9.5
	その他	1	4.8
	計	21	
51 ～60 歳 ３１例	慢性腎炎	15	57.7
	ＤＭ腎症	3	11.5
	ネフローゼ	4	15.4
	ループス腎炎	1	3.8
	嚢胞腎	1	3.8
	その他	2	7.7
	計	26	
61 ～70 歳 ２５例	慢性腎炎	12	60
	ＤＭ腎症	6	30
	ネフローゼ	1	5
	その他	1	5
	計	20	
71 歳～ １８例	慢性腎炎	6	37.5
	ＤＭ腎症	3	18.8
	腎摘後	2	12.5
	その他	5	31.3
	計	16	
	総計	89	

各群において慢性腎炎が最も多く，51～60歳の群以外はＤＭ性腎症が次いで多かった．年齢の増加とともにネフローゼの比率が低下する傾向にあった．高血圧の有無については，降圧剤投与を行なっているかどうかで判断したが，確認できた100例のうち61例（61％）に認められた．初発症状は蛋白尿65例(61.9％)，高血圧37例(35.2％)，浮腫32例(30.5％)で蛋白尿が最も多かった．家族歴では高血圧23例(21.9％)，腎疾患19例(18.1％)，糖尿病12例(11.4％)の順に多く，全症例中50例(46.7％)に認められた．

(2)93例の経産婦のうち，母子手帳あるいはアンケート調査にて妊娠分娩産褥経過を検討できた，55例(38～61歳)の対象症例の内訳を表３に示す．

母子手帳は27例(49.1％)に確認された．

表３．５５症例の中毒症型別による分類

中毒症分類	症例数	初発年齢（歳）	透析導入年齢（歳）	最終分娩より透析導入までのの期間（年）
純粋型後遺症なし	17	37.6 ±6.7	42.8 ±6.7	13.8 ±5.8***
純粋型後遺症あり	13	29.6 ±6.5*	41.2 ±6.8	12.5 ±5.0***
混合型	7	16.9 ±6.8*	39.1 ±3.3**	11.1 ±4.6***
中毒症なし	18	40.9 ±9.2	46.1 ±3.3	20.9 ±7.2

Mean±ＳＤ

*：Ｐ＜ 0.05，純粋型後遺症なし，中毒症なしＶＳ純粋型後遺症あり，混合型

**：Ｐ＜ 0.05，中毒症なしＶＳ混合型

***：Ｐ＜ 0.005，中毒症なしＶＳその他

37例（67.3％）に妊娠中毒症が認められた．

妊娠中毒症は純粋型30例，混合型7例であった．

純粋型のうち後遺症を認めなかったものは17例，認めたものは13例であった．表３に示すように，腎症状初発年令は，妊娠中毒症純粋型後遺症なしの群(Ａ群)37.6±6.7歳，妊娠中毒症純粋型後遺症ありの群(Ｂ群)29.6±6.5歳，妊娠中毒症混合型群(Ｃ群)16.9±6.8歳，妊娠中毒症既往なしの群(Ｄ群)40.9±9.2歳であった．　Ｃ群と他の３群間に，またＢ・Ｃ群とＡ・Ｄ群間には有意な差が認められた．透析導入平均年令は，それぞれＡ群42.8±6.7歳，Ｂ群41.2±6.8歳，Ｃ群39.1±3.3歳，Ｄ群46.1±6.9歳であった．Ｃ群とＤ群との間には有意な差が認められた．

最終分娩年令は各群間に差はなかった．最終分娩より透析導入までの期間は，それぞれＡ群13.8±5.8年，Ｂ群12.5±5.0年，Ｃ群11.1±4.6年，Ｄ群20.9±7.2年であった．Ｄ群と他の３群間には有意な差が認められた．　表４に５５例の基礎疾患を示す．

表４．中毒症・高血圧の各群における基礎疾患の有無による分類

分類	慢性腎炎（％）	ＤＭ腎症（％）	ネフローゼ（％）	その他（％）
純粋型後遺症なし群	58.8	0	17.6	23.5
純粋型後遺症あり群	61.5	0	15.4	23.1
混合型群	71.4	0	0	28.6
中毒症なし群	33.3	33.3	11.1	22.2
高血圧群	53.3	16.7	16.7	13.3
非高血圧群	48.0	4.0	8.0	40.0

中毒症群では慢性腎炎が最も多かった．中毒症既往のない群では糖尿病性腎症が慢性腎炎とともに6例(33.3％)と最も多かったが，慢性腎炎の比率は低下していた．高血圧の有無による分類でも慢性腎炎が最も多かったが，高血圧群においても糖尿病性腎症が多い傾向が認められた．

表５．高血圧の有無による分類

分類	中毒症合併率	素因保有率	平均出生体重±ＳＤ(g)	低出生体重児発生率
高血圧群	62.1	60.7	2839 ±628 *	10.7
非高血圧群	72.0	44.0	3096 ±616	17.4

*：Ｐ＜ 0.05

率：％

表５に示すように高血圧群に比べ非高血圧群の方が，妊娠中毒症合併率，異常分娩率，低出生体重児の発生率は高い傾向にあった．平均出生体重は高血圧群において有意に低値であり，高血圧素因保有率は非高血圧群より高い傾向にあった．

表６に家族歴を示す．

表６．５５例の家族歴

	高血圧	腎疾患	ＤＭ	計*
妊娠中毒症あり（３７例）	9	8	2	１８例
比率（％）	24.3	21.6	5.4	51.4
妊娠中毒症なし（１８例）	4	4	7	１１例
比率（％）	23.5	23.5	41.2	61.1
高血圧あり（３０例）	8	7	8	19例
比率（％）	26.7	23.3	26.7	63.3
高血圧なし（２０例）	5	5	1	11例
比率（％）	25.0	25.0	5.0	55.0

*：家族歴を１疾患以上有する透析患者数

妊娠中毒症群および非妊娠中毒症群間に，高血圧・腎疾患については特に差を認めなかったが，非妊娠中毒症群において糖尿病の家族歴が有意に多かった．

高血圧群と非高血圧群との比較では，高血圧・腎疾患については特に差は認められなかったが，糖尿病は高血圧群において有意に多かった．

考察：妊娠中毒症は減少傾向にあるとされているが，産科領域では依然として母児に危険な代表的な疾患の一つであることに変わりはない．しかし，妊娠中毒症の腎症状の長期予後を検討した文献は少ないため検討を行なった．原因疾患では慢性腎炎が以前から最も多かったが，最近は糖尿病患者の増加とともに，糖尿病性腎症が急速に増加しており，今回の検討でも同様の傾向が得られた．糖尿病性腎症は，他に網膜症や心血管病変を伴うことが多いため，その予後は他の原因疾患に比べ不良であるとされている．従って，増加しつつある透析患者対策の第一は，糖尿病患者を厳重に管理し，糖尿病性腎症を予防することである．しかし，今回検討した中毒症の既往との関係では，中毒症群には１例もＤＭ腎症は含まれておらず，別な観点からのアプローチが必要である

と思われた.

妊娠分娩産褥経過を十分検討できた55例中37例(67.3%)に中毒症が認められたが，37例のうち現在の高血圧群と非高血圧群との比較では，平均出生体重以外2群間に有意な差は認められなかった．原発性高血圧とは違い，腎不全の結果二次的に現在高血圧に至った症例も含まれていると考えられ，妊娠分娩時にまで遡ってその影響を考えるのは無理があるのではないかと考えられた.

今回の検討では，透析導入年令や最終分娩より透析導入までの期間が，中毒症混合型群において中毒症既往なし群より有意に若年令であり短期間であったが，妊娠中毒症純粋型群とは有意差が認められなかった.

しかし，透析導入年令や最終分娩より透析導入までの期間は，混合型群において純粋型群より若年令，短期間の傾向が認められており，まだ検討の余地があると思われた．母子手帳の確認も約半数でしか行なわれておらず，詳細な検討と症例数を増やし，確認できた症例だけを検討する必要性もあるのではないかと思われた.

中西らは中毒症混合型において，透析導入までの期間は，産後定期通院した症例は平均8.1年，まったく通院しなかった症例は5.0年であったと報告し，管理を行なうことにより透析導入を阻止することができないまでも，少しでも延長できる可能性を報告している．妊娠中毒症にも種々の基礎疾患，重症，軽症等程度も様々であり，簡単に結論付けることはできない．今後，各症例を詳細に検討すると共に，レトロスペクテイブな調査からプロスペクテイブな方法も検討されるべきであると考えられた.

文献：(1)佐藤和雄，他：周産期医学，19：1037，1989
(2)九嶋勝司，他：現代産科婦人科学大系，17B，1973
(3)中西祥子，他：透析会誌，19：705，1985

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:女性透析患者105名,全症例の妊娠分娩産褥歴,現病歴,既往歴等について問診を行なった.妊娠分娩産褥歴を十分検討できたものは55名(38～61歳)であった.(1)対象105名中基礎疾患は慢性腎炎が最も多かったが,最近はDM腎症が増加していた.(2)対象55名中純粋型妊娠中毒症は30名,混合型妊娠中毒症は7名,妊娠中毒症既往なしは18名で,中毒症の既往があるものは67.3%であった.(3)透析導入年令および最終分娩より透析導入までの期間は,それぞれ妊娠中毒症群33.9±8.6歳,12,8±5.3年,既往なし群40.9±9.2歳,20.9±4.6年と妊娠中毒症群において有意に若年で期間も短かった.(4)混合型群は純粋型群に比べ同様の傾向が認められた.(5)純粋型で後遺症を残した群と残さなかった群間では,透析導入年令も最終分娩から透析にいたる期間も若年化,短期間傾向が認められた.
(6)現在の高血圧の有無による分類では平均出生体重が,高血圧群2839±628g,非高血圧群が3096±616gと高血圧群において有意に低値であった.
(7)妊娠中毒症既往なし群では6名(33.3%)がDM腎症であった.妊娠中毒症既往なしの群,高血圧群においてDMの家族歴を有する者が多かった.